

阿藤伯海



浅口市教育委員会

阿藤伯海旧居(記念公園内)のご案内

開館時間

午前9時から午後5時まで

休館日

毎週月・火曜日・祝日

12月28日～1月4日まで

入館料(阿藤伯海旧居)

個人	大人(高校生含む)	100円
	小人(小中学生)	50円
団体	20人以上の団体	80円
	20人以上の小中学生	40円

※シルバーカード、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳所持者は無料。



●お問い合わせ先

阿藤伯海記念公園 岡山県浅口市鴨方町六条院東2385
☎ (0865) 44-9255

所管 浅口市教育委員会 浅口市鴨方町鴨方2244-2
☎ (0865) 44-7001 FAX (0865) 44-7602



阿藤伯海

六
大簡阿藤伯海先生は、明治二十七年二月十日、鳴方町六条院東の相部の里に生まれた大詩人です。はじめ近代ヨーロッパの象徴詩に共鳴し、のちに詩の極致を盛唐の詩人杜甫に見出しました。古代王朝文化を慕い「封建最後の人」を自負して、醜い欲望の横行を肯定する現代を軽蔑した、孤高の境地を漢詩の詩型で詠じました。昭和四十年四月四日、七十二歳の生涯を閉じた時、絶筆の詩に「阿刀大簡」と署名してあり、墓標の文字は「大簡阿刀先生之墓」と刻まれました。先生が愛用した別名の「簡」と雅号の「大簡」は『論語』の「大いなる志」の意を取ったものです。正々堂々と王道を歩んだ生涯は、大いなる選択・大いなる文学・大いなる簡素であったのです。「阿刀」は音のもじりで、奈良仏教の貢献者阿刀氏玄昉や、平安時代空海の母方の伯父阿刀氏の子孫であると擬装したものです。先生が落款によく用いた「三教弟子」は、神も孔子も釈迦も窮極は一つに帰着するのでしょうか。



生家 母屋

維摩ノ一榻

坐口ニ言ヲ忘ル

主人



虚白室自画自賛の図

臥龍洞

伯海先生の生家は大地主であり、代々学問や芸術を重んじた家柄でありました。長男であることを示す「伯」の字を用いて、戸籍名は「伯海」とつけられました。か弱い体質でありましたがよく耐えて、矢掛中学校から第一高等学校・東京帝国大学・京都帝国大学大学院と学業を積み、学者として、また詩人として、不朽の名声を伝えることになりました。そしていつしか人々は「はつかい先生」と呼びならわすようになったのです。

法政大学と第一高等学校の教授時代に、先生を生涯の師と仰ぐ教え子たちが数多く現れました。この師弟の關係のすばらしさは、是非あとで紹介する文献によって見てください。昭和十九年の暮れに、先生はその教授の職を辞して郷里の生家に隠棲し、母堂の孝養に努めます。京都の恩師君山狩野直喜博士は、これに「臥龍洞」の大字を揮毫して贈られました。天に昇る龍のような松の大木は、主人の姿でもあるという含意のある命名です。惜しいかな、その松は今は見られませんが。

問フ莫カレ臥龍

何レノ日ニカ起ツト

周南木下彪



間谷題黄葉亭の詩

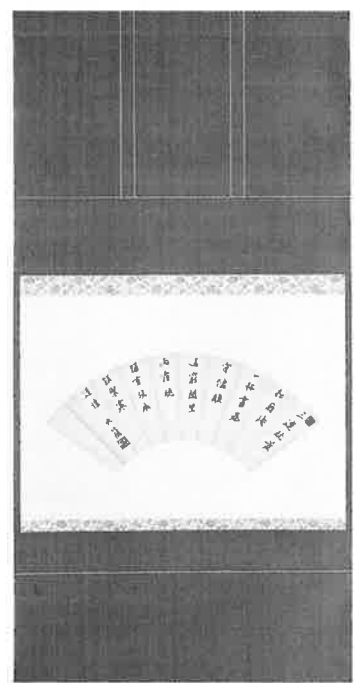
四山蕭寂^{セウセキ}夕^{タリ} 半林ノ秋
 黄葉亭^{ワカハツ}辺 晚景^{ワカ}幽^シ
 白髮^{ハクハツ}ノ儒臣 何処^{ナカ}ニカ去^ル
 空^カシク聞^ク澗水^{カンスイ} 今^{イマ}ニ至^ルマデ流^ルル^ルヲ
 癸巳^{スイシ}孟冬^{メイトウ}旧作^{キウサク}ノ間谷^{マニ}ニテ
 黄葉亭^{ワカハツ}ニ題^ススルノ詩^ヲ録^スス 大簡

書八人ナリ

「先生には、峻厳と温和の両面に接しましたが、お人柄を一言で言えば『寛厚』に尽きます。」これは三重野康・元日本銀行総裁、第一高等学校受業生の言葉です。伯海先生の筆蹟は、まさにその人柄を思わせ、恩師君山先生のそれに酷似しています。遺品の中には君山先生の書を臨書したり模写したりした紙片が残されています。君山先生から与えられた書簡には、私事を打ち明けたものもあります。読書を怠るな、詩を作ったら見せてくれ、健康は大丈夫か、様子を知らせよ、などと気遣い励ますことはしばしばでした。伯海先生の天分は、君山先生の漢学を学んで美しい花をつけ、大きな実を結んだと言えるでしょう。伯海先生の書が、重厚温雅であるのは、君山先生の感化に相違ありません。

なお、法政大学の齋藤磯雄氏は、伯海先生の書簡までも臨書したそうです。第一高等学校の高木友之助氏もまた伯海先生の書を学んでいます。この小冊子の題字は高木氏の書簡から選ばせていただきました。

先生の書蹟は、書簡の類は別として、条幅や額などは極めて少ないように思われます。浅口市教育委員会所蔵の前ページの詩箋やここに掲げる自述の詩と句の二幅などは貴重なものです。



遣懷詩



自述句

三逕^{サンケイ}荒^{イクラワ}ニ就^ツキ 松菊^{シヨウキク}殘^{ザン}ス
 一牀^{イツシヤウ}ノ書卷^{シヤクワン} 儒酸^{ジュサン}ヲ守^モル
 送窮^{ソウキウ}ノ閭巷^{リョウカウ} 霜雨^{シモフ}ルノ晚^{バン}
 猶^ナホ故^コ衣^イ有^アリテ 能^{ヨク}ク寒^{カン}ヲ禦^{フセ}グ

遣懷 大簡

寂莫^{セキバク} 吾^ワガ道^{ミチ}ヲ憐^{アハ}レム
 依稀^{イキキ} 古^コ人^{ジン}ニ似^ニタリ

自述 大簡



吉備真備を顕彰した絶筆の詩碑（記念広場内）

絶筆の詩碑

伯海先生が日本の近体詩の詩壇においても評価されていることは、知る人ぞ知るところであります。主たる業績が漢詩であることは誰もが認めるところです。いわゆる絶筆の詩は伯海先生の詩名を高くしたと言われますが、それは先生が病身の最後の力をふりしぼって、推敲を重ね、浄書を終え、これを枕もとに置いて、翌日瞑目したという、詩道一筋の生涯が劇的な最期であったからです。この詩「右相吉備公館址作」は右大臣吉備真備を顕彰したいという公の出身地の有志から依頼を受けて作られ、その碑は矢掛町東三成に建てられました。

鴨方町では、先生に親炙した六条院東の篤志家が第一高等学校の門下諸名士と謀って、先生を顕彰するための詩碑として、同じ詩を刻んで郷里の地に建立しました。側に副えられた碑は、清岡卓行氏が、恩師景仰の文を作り、高木友之助氏がこれを書いたものであります。次ページにその全文を掲げますので、熟読玩味してください。

（※印の箇所は当時の或る文献に拠るもので、今は、後掲の略年譜に記す所に従って理解してください。）

ワレ ウマルコト センザイオソシ
我生千歳晚

ナミダヲオホヒテ サウシンニタイス
掩淚對蒼岑

目撃つた

阿藤伯海先生ハ明治二十七年二月十七日[※]ニ岡山県鴨方町テ豪農ノ長男ニ生マレタ 諱ハ簡 字ハ大簡 二十世紀中葉日本ノオソラク最高ノ漢詩人デアル 六條院ノ小学校時代カラ秀才デ各安端正 矢掛中学校ヲ經テ第一高等学校文科ニ学ビ岩元稷教授ニ影響サレタ 東京帝大哲学科ニ入ツタガ上田敏ニ私淑シ近代西歐ノ詩美ニ因ワレタ 大正十三年卒業論文ノ対象ハノヴァーリヌ 同ジコロカラ李白杜甫ナド古代中国ノ詩人ニ魅惑サレ京都帝大ノ狩野直喜博士ニ中国学ヲ学ンダ 独身ヲ守ツテ鎌倉ニ住ミ現代詩ノ秀作「哀奮激」ヲ發表シタガソ、ノチハ漢詩制作ニ最大ノ情熱ヲ注イダ 昭和十年ゴロ法政大学テ漢文学ヲ講ジ同十六年第一高等学校教授トナツテ漢文学ヲ担当 戦時ニアツテ王道ヲ尊ビ霸道ヲ排スル識見 文学ヘノ理想主義的ノ愛着 寛厚ナ人柄 時流ニ超然ノ羽織袴コレラハ多感ナ一高生ノ敬慕ノ的トナツタ 同十九年暮、略澹タル戦局ノ中デ辞任シテ帰郷 故宅

臥龍洞ヲ看經三昧ノ生活ニ入ツタ 戦後農地改革ニ先立チ田地ヲ小作人ニ贈ツチ一部カラ嘲笑サレタガ恬然トシテイタ 同二十四年岡山大学創設ニ尽力 再ビ教壇ニ立ツコトハナクソノ後孤居十数年卧龍松ノ傍デ詩作読書ニ耽ツタ 同四十年四月四日死去 前日ニ完成シタ「古相吉備公館址作」ハ高雅芳潤ノ代表作デアル 松大シタソノ草稿ヲ刻ンダ石碑ガ矢掛町東三成ノ吉備大神宮境内ニ建立サレタ 同四十五年ニ先生ノ漢詩約四百八十編ガ「大簡詩草」トシテ一高教授時代ノ門下生ヲニツツテ刊行サレタ 法名 臥龍庵大簡居士 墓ハ大簡阿刀先生之墓ト刻シ旧宅近クノ丘ニ在ル

昭和五十九年八月吉日

受業 清岡卓行 撰文
同 高木友之助 謹書

序
能ク以テ
尚シ近什有ラバ

我ニ示サンカ 君山

卓タリ澆季ノ日

公義名声高シ 豹軒

其ノ詩ハ清雅

其ノ人ハ

高士ナリ 荊園

題簽 君山書集字



大簡詩草 私家限定版

大簡詩草

伯海先生の事績は、多くの英才に全人的な感化を及ぼした教育の一面と、形あるものとしては、邸宅の修造と詩の創作とが挙げられます。

風韻豊かな臥龍洞一帯は田畑山林と共に鳴方町に寄贈され、平成十七年度に先生の精神を継承する施設として整備を図りました。

詩は、漢詩四百八十首を一巻一冊にまとめて『大簡詩草』と題する一書が公刊されています。序跋題簽に至るまで、生前にあらまし準備されていたものを、高木友之助氏が先師の遺志に背かぬような典雅な姿に仕上げました。昭和四十五年、私家版の限定出版ですから、手にとつて見ていただきたいのですが、入手困難で残念なことです。

先生の詩は、大戦後の憤慨痛嘆すべき多くの事柄に対して、「涙ヲ掩ヒテ 蒼茫 野煙ニ対スー明治節感慨」のように凝視あるいは諦観の趣きが濃く見られます。ただその中で、肉親・恩師・知友・門人との関わりには温い安らぎが見えて、先生の人柄を垣間見る思いがします。

参考文献

- 『大簡詩草』前記の通りです。
- 『鳴方の先賢』昭和六十年。鳴方町文化協会の石部貞樹先生が郷土の先人を記述されたもので、伯海先生も収めてあります。
- 『阿藤伯海先生追懐』昭和四十一年。先生の逝去直後に友人と教え子たちが綴った、哀悼の思いのなまなましい文集です。絶筆の詩も解釈してあります。
- 『詩禮傳家』昭和五十年文芸春秋社、平成五年講談社文芸文庫。著者清岡卓行氏は第一高等学校の教え子、詩人であり、また芥川賞を受けた作家でもあります。教育者としての先生、詩人である先生の人間像を、詩情豊かな筆致で描いてあります。
- 『齋藤磯雄著作集』平成三十五年東京創元社。著者齋藤氏は法政大学の教え子、フランス文学研究者。第Ⅱ巻所収の「随筆集ピモダン館」第Ⅳ巻所収の「書簡」に、詩の神髄を教えられた恩師の一言一句に全霊を傾注した著者の所信と、確実な資料を見ることができま



『詩禮傳家』初版本と文庫本

阿藤伯海略年譜

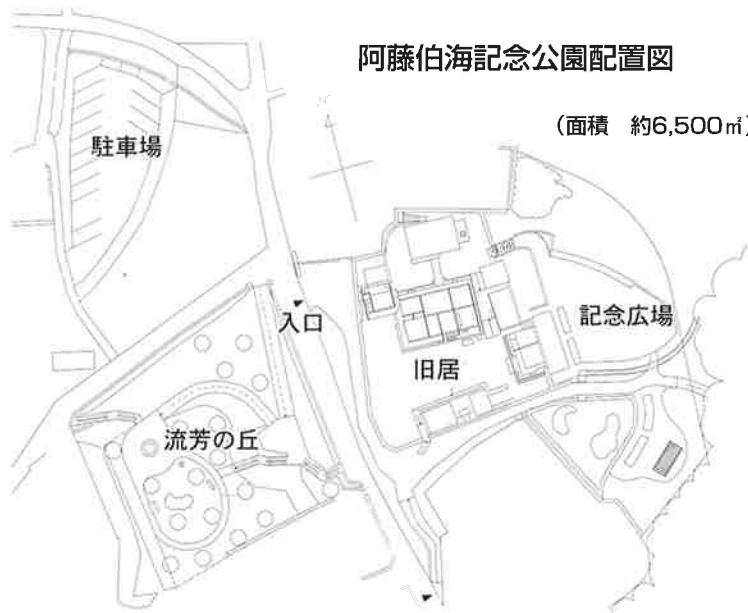
年代(年)	西暦(年)	年齢(数えし)	事 項
明治二七	一八九四	一	二月十日誕生。岡山県浅口郡六条院村(現鴨方町)、阿藤曆太夫留の長男。本名伯海(はくかい)。後年、簡(かん)と自稱。大簡(おほかん)を、伯海(はくかい)などを号とし、また姓を藤(ふじ)と、阿刀(あとう)などと著した。
大正二	一九一三	二〇	岡山県立矢掛中学校卒業。
一〇	一九二二	二八	第二高等学校文科卒業。 この年、『上田敏詩集』の編纂者山内義雄氏の仕事に献身的に協力。
一三	一九二四	三一	東京帝国大学文学部西洋哲学科卒業。 卒業論文「ヴァーリスの悲嘆と慟哭」。 京都帝国大学大学院入学。藤代禎輔、朝永二郎両教授の指導を受けるが、シナ学に傾倒し、君山狩野直喜、豹軒鈴木虎雄両教授に親炙するに至った。
一五	一九二六	三三	法政大学講師、後教授。 フランス文学科の学生齋藤磯雄氏と出会う。その同人誌に漢詩を寄稿する。
昭和六	一九三一	三八	休休詩「哀藹微」が春陽堂「明治大正昭和文学全集」一「詩篇」一に収載される。 三月二十日、父曆太死去。

一三	一九三八	四五	一月、君山先生から作詩を激励する書簡を受ける。これは詩集『大簡詩草』の序文に充てられた。
一六	一九四一	四八	第一高等学校講師、後教授。漢文担当。 この年、「藤門書生」八名(青山行雄、清岡卓行、小池巖、高木友之助、三重野康、牟田口義郎、村上博之、山本阿母里)と出会う。
一九	一九四四	五一	官職を辞任して、十月、郷里に帰る。
二一	一九四六	五三	農地を無償で小作人に与える。
二二	一九四七	五四	十二月、君山先生逝去。
二四	一九四九	五六	五月、豹軒先生来訪。備中の旧蹟を案内する。以後しばしば来訪、応酬の詩多し。
三〇	一九五五	六二	八月二十八日、母天留死去。
三一	一九五六	六三	岡山県教育委員に任命される。任期一年。以後切の職に就かず。
三八	一九六三	七〇	一月、豹軒先生逝去。
四〇	一九六五	七二	四月三日、「右相吉備公館址作」の詩成り、細楷で浄書した。これが絶筆となる。碑は矢掛町東三成の吉備大臣宮の

四一	一九六六	四一	境内に建てられた。
四五	一九七〇	四五	四月四日、四時四十四分病没。 法名「臥龍庵大簡大居士」。 阿藤氏の墓所に葬られ、墓碑の文字は「大簡阿刀先生之墓」と刻まれている。
五〇	一九七五	五〇	十月、友人受業生等による「阿藤伯海先生追懐」成る。
五九	一九八四	五九	四月、「大簡詩草」不分巻一冊排印本發行。唐木仕立て、帙入り、私家版。序跋其他構成は生前著者の指定する所、校字装幀万般を高木友之助氏。
平成一一	一九九九	八〇	清岡卓行氏『詩禮傳家』文藝春秋社、平成五年講談社文芸文庫。
平成一八	二〇〇六	八七	八月、有志、絶筆の詩碑一基を真止戸山神社参道脇に建立。 この詩碑は、平成十七年十二月、阿藤伯海記念公園に移設された。 相続者令甥田中喬氏は、墓所を除いて、阿藤家の所有する宅地家屋田畑山林すべてを文物什器と共に鴨方町に寄贈された。町は三重野康氏を名誉委員長とする識者による整備計画策定委員会の答申を求めて、活用のための整備を図ることとした。 阿藤伯海記念公園竣工 一月十八日オープン

阿藤伯海記念公園配置図

(面積 約6,500㎡)



題字 元中央大学総長 高木友之助氏の遺墨
執筆 岡山大学名誉教授 廣常人世氏